



地域の取り組み

京都府向日市

子育て当事者の思いを土台に

NPO法人子育て支援 ねこばす 理事長 高山 紀公子

人口急増の街

向日市は、京都市と長岡京市に隣接する人口約5万5千人、面積7.84㎢と西日本で1番小さく、国内全体でも3番目に小さな市です。市内にはJR東海道線の駅が1駅、阪急京都線の駅が3駅あり、京都や大阪への交通の便が良いため大都市近郊のベッドタウンとして発展し、府内トップクラスの人口密度の高い街でもあります。特にここ数年前よりキリンビール工場跡地の開発で大型商業施設のイオンモールができ、高層マンションが次々と建設され、急激な人口増加になっています。それにともない残念なことに保育所の待機児童が出ています。

現在私たちは、新市街地で「つどいのひろばねこばす」を開設しています。建設会社の新築木造5階建て本社ビル1階のワンフロアを地域貢献のために貸していただけることになり、2016年夏にこちらに引っ越ししました。新市街地のため転入の方が多く、ひろばでの交流はとても新鮮な出逢いになっています。

地域の子育てを応援しよう

「子育て支援ねこばす」が任意団体として出発したのは、2001年秋でした。

当時、社会的に児童虐待が大きく取り上げられていました。私自身は、向日市の総合計画審議委員をしており、そのなかで、地域の住民同士が助け合える仕組みづくりがしたいと思っていました。

ちょうど国の施策でも、子育ての助け合いをする保育サポーター制度ができ、保育サポーター養成講座を受講しました。同じ地域で受講した人に声をかけ、お互いに協力しあって、地域の子育てを応援しようとグループができました。最初の話し合いでは、虐待になるまでに、誰かの助けがあれば何とか虐待が防げるのではないか、自分の子育ても大変だった、たたいてしまう気持ちもわかる、など子育ての当事者としての自分たちの思いを土台に、今、大変なお母さんを手伝おうということになりました。具体的には、保育の依頼があった時に、子どもさんをお預かりしたり、シッター型で、出向いて保育を受けるといったものでした。

行政からの保育ルームの依頼も受けるようになり、様々なケースを受けるうち、女らしさ、男らしさ、母親役割、妻役割の中で自分らしさを見失いしんどくなっている人が多いと感じジェンダーの問題も自分たちの研修に取り入れていきました。

子育てと介護のダブルケア

私自身の子育て期は、もう30年も前になります。産

前産後84日の産休しかなく、まだ生後2か月にもならない赤ちゃんを実家に預け、仕事から帰って夫と二人実家でご飯を食べ、自分達の家で3人で帰って寝るだけという生活でした。その生活に疲れ、復帰後わずか8か月で退職し、専業主婦になりました。仕事を続けようと頑張ったのにできなかった挫折感と、慣れない子育てと、ちょっとやりにくい子どもとの相性。収入の半減。満たされない思いをもちながらの子育て生活の出発でした。

それでも、何とか乗り切ったのは自分の母が協力してくれたからです。そんな中、次男が1歳になる前のことです。私の弟が人命救助の不慮の事故で亡くなり、そのショックで1週間後に母が脳梗塞で倒れました。どうにも動きが取れなくなり、行政の窓口で相談したら保育園の一時預かりを紹介してくれたのですが、そこまで連れて行く手段もありませんでした。結局義母が手伝いに来てくれました。私の子育ての大きな支えの母が倒れ、今度はその母の介護がありました。子育てと介護のダブルケアが始まりました。長女が6歳、長男が3歳、次男が0歳でした。母はまだ59歳でした。

誰かの役に立つ喜び

あの時、本当に社会的な支援が欲しかった…。母の方には介護保険という社会資源がありましたが、当時の子育てにはちょうど良い社会資源はありませんでした。この経験が子育て支援と私自身を結び付けたと思います。そして、弟の死は、それまで人の後ろにいて消極的だった自分に人の役に立てることをしたいと思わせる出来事でした。父と一緒に母の介護をしながらやっと生活が落ち着き始めたのは、次男が幼稚園に入園したころでした。そのころから保育付きの講座に参加するようになり、毎週土曜日午後2コマ、1年間の京都府女性問題アドバイザー養成講座は、自分を見つめ直すきっかけになりました。自己肯定感、母娘問題、らしさのとりわれ、働き方、メディアリテラシー、等々。

その時の学びを「ねこばすひろば」という名前で、自分達が出し合った会費の中から講師を招き、お母さんに伝えるという活動も始めました。私たちの活動は小さな地味なものでしたが、それでも



保育を依頼される方、ねこぼすの講座を受ける方にはとても喜んでもらえました。私自身誰かの役に立てていることが喜びでした。

その後、地域にファミリーサポートセンターができ、行政と協力しながら支援を続けてきました。ファミサポで担えない産褥ケアや、お泊りの預かりも受けることもありました。

ひろば開設に奔走

そんなある日のこと、母子同室の保育ルームでお母さん同士が本当に楽しそうに語り合っておられ、こういう場が求められていると強く感じました。なんとか自分たちの手で「ひろば」ができないものか、それを思ったのが2013年秋。行政の次年度の予算決定までに申し入れにいかないと。そんな行政の仕組みを教えてくれたのは、一緒に子育て支援をしていたほかの地域の仲間です。

急ぎよ定例会を開いて、ひろばをしたいとメンバーに呼びかけました。子育て支援課に相談に行き、地域子育て支援拠点事業を市民の手で実施したいとお願いしました。10月の会議から始まり決定したのは翌年2014年1月でした。それからNPOにするための事務処理、拠点実施場所の物件探しが始まり、怒涛のように推し進め。4月に小さな1戸建てに入居し5月にNPOの認証を受け、5月17日から地域子育て支援拠点「つどいのひろばねこぼす」を開設しました。NPO法人の設立趣旨書は原田先生（本会代表）の「子育て支援とNPO」を読み込んで書きました。

任意団体として13年の活動で繋がりあった人脈が力になってくれました。

思い返しても、一緒にやってきたメンバーと、まわりで支えて下さった関係者の方々への感謝の気持ちで一杯になります。

NP・BPとの出会い

「ねこぼす」を始めてから3年目の2004年に向日市の主任児童委員をすることになり、具体的な児童虐待に直接関わるようになりました。児童相談所の方と家庭を訪問したり、ケース会議に出席したりする中で、今まで見えていなかった児童虐待の複雑な要因をまざまざと認識し、自分にできることを探しました。そしてNP（Nobody's Perfect）のファシリテーター養成講座を受講しました。受講後、お母さん達に子育てのことや、自分のことについて丁寧な学びをしてもらいたいと思い、虐待の未然防止にもなるNPの講座実施を行政や社会福祉協議会に働きかけたのですが、予算の件で実施には至りませんでした。その8年後、社会福祉協議会がNPをすることになりました。ファシリテーターは本部から来ていただいて、ねこぼすは保育スタッフとして参加しました。世の中の流れが変わってきたのだなと思いました。けれどもNPは参加者の確保が難しく、BPプログラム（赤ちゃんがきた！）が新しく開発されたこともあり、社協でもBPプログラムの実施になりました。ねこぼす



ではその時に関わっていたお母さんを参加者として紹介しました。BPプログラムの見学に行き、ファシリテーターのYさんとお話をする機会をもち、ファシリテーターをするように勧められ、ねこぼすのスタッフ3人で養成講座を受講することになりました。夏に受講し秋に早速1回目の実施をしました。

本当に自分にできるのか、とても不安でした。人前で話すのが不得意なうえ、時間通りに進行できる自信がなかったのです。何より間違ったことをしてしまったらどうしようと、ドキドキしながらの開始でした。パソコンが不得意でワードしか使ったことがなかったので、初めてのエクセルの報告書の提出がとても大変でした。何時間もかかって打ち込んだのに消えてしまったり、パソコンでの同じ失敗を何度もしました。サポーターのYさんはテキストの紹介で些細な発言をほめてくださり、それが嬉しくて励みになりました。丁寧な指導をして頂きました。

向日市では社会福祉協議会主催、「ねこぼす」共催で年に3回実施しています。年間500人ほどの出生があり、その中で第1子のうち、約60人が受講できることになっていますが、参加者は1回につき12,3人ほど。受講後それぞれグループを作ってサークル活動をされています。ひろばにも来られることがあるので、お母さんと私たちもつながり親子の成長を見守っています。

大切なのは人と人のつながり

ずっと当事者のつもりで子育て支援にかかわってきました。自分のこととして、自分もしんどかったから、次の世代を応援しようと続けてきました。指導者ではなく支援者という伴走者として対等な立場で、今のお母さん達と一緒に暮らしやすい地域社会をつくっていかれたらと思います。暮らしやすい地域社会に何より大切なのは人と人の繋がりです。人との出逢いで人生が豊かになると思っています。一緒にやっていく仲間との出逢い、関わり合った親子との出逢い、たくさんの応援して下さる人との出逢い、一人一人と大切にかかわりながら活動を続けていきたいと思っています。

この活動を次の世代にバトンをつなぐことが大きな課題です。今のスタッフの中にもかつては子どもの保育を依頼していた人もいます。自然なかたちで今の若いママ達が活動をつないでくれることを願っています。